

関東支部 60 周年、還暦、そして



宮 村 一 夫

本部に遅れること 4 年、1956 年 9 月に産声をあげた関東支部は今年還暦を迎えます。昨年秋には 60 周年記念事業として小熊幸一実行委員長のもと、142 名の参加を得て、記念式典および講演会を盛会のうちに開催することができました。また、丹羽 修副委員長をはじめとする編集委員のご尽力によって記念誌を刊行することができました。会場をご提供いただいた工学院大学の佐藤光史学長、釜谷美則先生、ご講演いただいた中澤裕之、蟻川芳子元支部長の先生方、坂本哲夫先生（工学院大）、吉村悦郎先生（東大）、記念事業の準備をご担当いただいた関東支部の委員の面々、そして参加者各位には大変お世話になりました。ここに厚く感謝申し上げます。

この一年、本部では理事、支部では支部長という立場でしたので、本部と支部のかかわりを再考する契機となりました。支部が人的交流を通して地域の組織化、活性化を担当するのに対し、本部は学会全体の方針を定め、対外的な折衝、情報の発信を担当するというのが役割分担でしょうか。本部に近い関東支部では切り分けが難しいところもありましたが、重複のない運営を心がけました。

ところで来年 9 月には、久しぶりに本部が主催する年会が開催されます。会長からの打診を受けて、その実行委員長をお引き受けいたしました。中井、由井、東、国村、野島の大学所属教員とともに、3 年前に開校したばかりの東京理科大学葛飾キャンパス（最寄駅：JR 常磐線金町駅）での開催を予定しています。長らく年会や討論会は、支部が企画・運営を担当してきましたが、この年会では、企画は本部、実行部隊は関東支部と役割を分担する年会となるはずです。東日本大震災の影響で、過去 10 年以上にわたり関東では年会が開かれていません。久しぶりの関東での年会ですし、せっかくの新しい試みですので、全国の会員が集い、にぎやかな年会にできたらと考えています。運営に対するご提案やご助言を歓迎いたしますし、実りある年会となるよう、関東支部をはじめとする皆さまのご協力を、よろしくお願い申し上げます。

学会には職員も常駐していますが、運営の多くは会員のみなさんが委員となり、その無償の協力によって支えられているのが実情です。大学、研究機関、企業、あらゆる組織が余裕を失いつつある状況で、この形態での運営が今後も続けられるのか、そろそろ考える時期に来ているように感じます。一方、先端科学技術の多くが経済原則の名のもとに囲い込まれていく中で、人類共通の財産である学術の進歩をどのように担保するのか。学術団体としての学会の重要性は高まっているとも言えます。どうしたらよいのか。やはり本部による国際ネットワークの構築と、“草の根”支部活動を通した人的交流の場つくりが両輪かな。そう感じています。

〔Kazuo MIYAMURA、東京理科大学理学部、日本分析化学会関東支部長〕